

Title	韓国における讃美歌の社会的位置付けについて
Author(s)	鄭, 守暎
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/57854">https://hdl.handle.net/11094/57854</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【39】

氏名	鄭 守 暎
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 23493 号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	韓国における讃美歌の社会的位置付けについて
論文審査委員	(主査) 教授 根岸 一美 (副査) 教授 藤田 治彦 准教授 伊東 信宏

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、讃美歌が韓国社会にどのように受け入れられ、近代の社会状況に対してどのような在り方を示してきたかという問題を解明する試みであり、4章から構成されている（A4判122頁）。

第1章「韓国の近代形成と基督教」では、朝鮮社会が長年の鎖国政策によって崩壊の危機に瀕し、開国する以外に国を立て直す方法がなかった状況のもとに、プロテスタントの宣教師たちが次々と入国し、医療や福祉事業を優先した宣教活動を始めていった様子を記述し、基督教が韓国に広く受け入れられるに至った要因についての考察を行っている。

第2章「韓国の西洋音楽教育」では、宣教師たちによる西洋音楽教育やミッション学校における教科内容、既成の讃美歌による音楽教育の諸問題、さらに初期の宣教師たちによる「韓国的讃美歌」の作曲の試みなどについて述べた後に、讃美歌の流入から現代までを4期に分けて考察している。第1期は「宣教初期讃美歌音楽教育の展開」と題され、朝鮮へ足を運んだ最初の宣教師とされるアレン（Herace Newton Allen, 1858-1932）が実質的な宣教活動を始めた1885年から1906年までを、第2期は「宣教復興及び日本唱歌教育の展開」と題され、平壤を中心として起こった「大復興運動」によりキリスト教徒の「爆発的増加」と教会の自治運営が始まった1907年から3・1独立運動（1919年3月1日）以後の教会弾圧までを、第3期は「社会的試練を迎えた基督教」と題され、3・1独立運動後に日本政府がそれまでの武断統治による抑圧策から文化統治による懐柔策へと転じた1920年から、韓国戦争の勃発した1950年までを、そして第4期は「韓国戦争と新しい時代への跳躍」と題され、1950年以後現代までを取り上げており、それぞれの時代における讃美歌の位置と意義についての考察を、楽曲分析を交えつつ展開している。

第3章「韓国における讃美歌文化の諸相と展開」では、まず、韓国の伝統音楽と讃美歌とを、リズム（律各）と旋律の面から比較考察し、次いで、日本統治時代における、日本唱歌の、讃美歌や童謡への影響について論じている。例えば「韓国創作童謡」について見ると、1910年代は、まだ韓国伝統固有の律各と日本唱歌による律各が共存する時期であったが、1920年代からは著しく日本唱歌の代表的律各である7・5調が多くなっているとされる。そして最後に、韓国戦争後の韓国における音楽文化の特徴ならびに韓国発の新しい讃美歌の在り方などにも触れて、結びとしている。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は開化期から日本による統治時代と第二次世界大戦、そして韓国戦争を経て現代に至る韓国の歩みのなかで、讃美歌が韓国の社会において果たしてきた役割はどのようなものであったかを明らかにすることを目指し、諸種の讃美歌集等の資料を探りつつ行われた労作である。論文に示されたデータによれば、1990年における韓国におけるプロテスタント信徒の数は、国内人口の23.8%に当たる約1034万人となっており（カトリック人口は5.3%の231万人）、このような基督教の普及の状況がいかんにして成立したのか、という問題についても、本論文は讃美歌の面からの解明の試みを行っており、意義ある成果を示しているといえよう。しかしながら、論文としての全体的なレイアウトについてはかなり未整理なところも見られ、例えば叙述の流れが時代の流れの点でしばしば前後するところなどもあり、見通しはずしもよくない点是指摘しておかなければならない。本論文に関する口頭試問は、2010年2月6日（土）、およそ1時間45分にわたって実施した。そこでは、1）キリスト教人口は現代でこそ多数となっているが、戦前の

時代までは人口比としてはわずかであり、それにも拘わらず「社会的位置付け」が探究されうる根拠はどこにあるのか、2) 戦後についての記述においては、西洋音楽といってもさまざまな形のものが入り込んでおり、その中でなお讃美歌の文化を語る根拠は何か、との問いや、3) 全体にキリスト教を支持する立場からの記述となっており、批判的批評的な観点からの考察も必要ではないか、という指摘などが行われ、さらに4) 本文中のいくつかの用語の扱いについても改善の必要が示された。しかし、これらの問いや指摘に対して、申請者はいずれも概ね良好な解答ならびに理解を示し、本文において十分な記述に至らなかった面を補う結果ともなった。本論文において提示された研究内容については、もとより十分な先行研究が見られず、手探りで得ていた感もあるが、数多くの讃美歌作品についての楽曲分析も着実に進められており、その地道な努力と成果は十分に評価されうる。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。